

幕末明治の写真師列伝 第八回 下岡蓮杖 その七

久之助（蓮杖）は外使の給仕役（安政3年8月から安政6年6月まで）となり、ハリスとヒュースケンに親しみ、暇をみてはこの二人より写真術を教えて貰おうとしたが、なかなかそのような機会を得ることができなかった。また、アメリカ本国の船もたびたび下田に来航し、欠乏所（※外国人に水や燃料などを売るための市場）に焼酎などの物を買う者もあり、久之助はそんな船員たちの歓待や世話もせねばならず、時にはそんな彼らを下田の町に案内することもあった。その様な際に彼らから西洋においては馬に蹄鉄を嵌めることを聞き、下田の鍛工を集めて、蹄鉄を鍛冶する技術を学ばせるということもあった。日本における馬の蹄鉄は、この時から始まるという。

ヒュースケンが写真術の概要を多少は知っていることは、久之助も気がついていて、そこで久之助はこのヒュースケンと親しくなることにして、密かにこのヒュースケンより写真術を教えて貰おうと考えた。このことは幕府に知れるとまずいと見え、ある日、嶽山に登り、山中の誰もいない場所で、久之助はヒュースケンより写真術を教えてもらうことになった。ヒュースケンは木の枝を折って、三又をこしらえ、紙を使って函（カメラ）に擬し、久之助が持ってきた鏡を持って、久之助をその函から離して立たせて、撮影する様子を示し、ガラス板に薬液を塗り、そのガラス板を使って撮影することを語った。また、撮影したガラス板を暗室において現像することを教えてくれたが、あくまでこれは撮影の様子を模したもので、本物のカメラ、暗室を使って撮影技術、現像などを再現したものではなかった。しかしながら、久之助はだいたいのところは理解することができ、後に自分でもカメラとなる函を作り、竹筒を嵌め、眼鏡のレンズを入れて、函の中には鏡も入れ置き、物像を写して、撮影の原理を研究することができた。また、ヒュースケンも一枚の写真を、久



下田市指定文化財 欠乏所跡

之助に贈ってくれたのである。

その後、ハリスは初代駐日公使となり、下田の領事館を閉鎖して江戸の元麻布善福寺に公使館を置くこととなった。そのため、ハリスとヒュースケンは下田を離れることとなった。これにより横浜は安政6年6月2日（1859年7月1日）に開港されることになる。

こうなると久之助もいつまでも下田にいるわけにはいかない。とはいえ、久之助はしばらくの間は下田奉行の下番役として奉公することになった。この下番役というのは、外国の艦船へ出張して検査する仕事であった。

安政6年10月17日（1859年11月11日）、江戸城本丸が焼失した。その後すぐに、所営の工事が始まり、久之助の師、狩野董川も公務多忙となり、久之助は師に招き寄せられ、その仕事を手伝うこととなった。その仕事もようやく終わると、董川は報償として久之助に金百両を贈った。久之助はこれを受けて横浜に行くこととする。

（森重和雄）